

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	19106010	研究期間	平成19年度～平成23年度
研究課題名	伝統木造建築物の構造ディテールに基づく設計法の構築に関する研究	研究代表者 (所属・職)	鈴木 祥之（立命館大学・立命館グローバルイノベーション研究機構・教授）

【平成22年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

国土の7割が森林の日本において長く培われてきた伝統木造建築物を、今の学問・工学で分析整理し、これらを基に設計法の構築を進め、再度日本に定着させようとする重要な研究であり、国民の大きな期待がある。この研究は、構造ディテールに関する研究と構造設計法の研究の2段階になっている。

1段階目のディテールに関する研究は、基本的に過去の研究成果も参考にしつつ進められるが、実験、解析が進めば進むほど、研究成果は発展的、展開的な形で次々に増えていく。この意味で十分な成果を挙げていることになる。

2段階目の設計法の研究は、構築したい伝統木造に備えさせるべき性能から実際の施工法まで含めて、全体を考えなければならず、地域性、入手できる木材、壁の構法、大工の技能、さらに計算法と設計法など、1段階目の発展的、展開的な研究とは異なり、纏めの方向、収束へ向けた研究である。この研究については、沢山の実験研究者が集まったから解決できるというのではなく、十分な議論と洞察力をもった決断の必要な研究である。この2段階目の研究は難しい課題であるが、研究代表者の考えとおり、残りの研究期間は設計法の構築に重点を置いて研究を進め、成果を出すことを期待する。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果どおりの研究成果が達成された。
A	伝統的木構造に関する研究は、木材、土壁などの材料特性のばらつきゆえに、理論構築が極めて困難とされてきた。しかし、研究代表者らは、公表論文からもわかるように、できる限り理論的アプローチを重要視し、経験に頼らない新しい伝統木造構築技術構築を目指している。この姿勢が続く限り、大きな発展が期待できる。